

ヒルガオ

佐々木信子

不動産会社の三上が運転する古い軽乗用車は、山あいの国道を登りきって集落の入口までくると、唸るようなエンジン音から解放されてスピードを上げた。

「田舎道だから、車が坂の途中でエンストしないかと心配していました。いいんですか、こんな場所です」

後部座席から棚田を眺めている菜緒に、三上はまた同じことを尋ねた。彼は最初からこの物件に乗り気がなさそうだったが、目的地はもう目と鼻の先のようにだ。

「どうして、棚田にフェンスを張り巡らせているのですか」

菜緒はずっと続く光景が気になっていた。

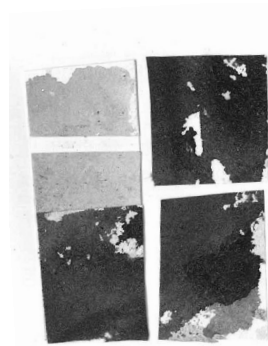
「イノシシが稲の中に入らないようにです」

「えっ、イノシシが出るのですか」

「大丈夫ですよ、夜行性だから。衝突事故は夜が多いですからね」

三上が何回も念を押した「こんな場所」とは、イノシシのせいだったのだろうか、菜緒は次の言葉が出なかった。カーラジオによると、日本各地でまた熱中症警戒アラートが発表されたようだ。九州も関東も居住地には関係なく、体温以上の日が続くとヒトは解けてしまうのではないかと、菜緒は花期が過ぎて茶色くなったままのアジサイを眺めながら思った。対向車も人通りもない交差点から右折すると、意外にもコンビニと農産物販売所があり、国道沿いには民家が点々とあった。『田舎』という基準値は、三上と菜緒では雲泥の差があるようだ。

「あー、取柄が一点ありますよ。医院がね、ほら、あそこ



に見えます」

三上の視線の先に木造の平屋があり、玄関先の看板も家と同じように古びていた。

「スズメバチに刺されたときに診てもらいましたが、高齢の先生は元気なのか。僕はそこの農産物販売所の裏で刺されたんですよ」

イノシシにスズメバチと、次は何が出現するのだろうと、菜緒は外を眺めるのをやめた。

「あつ、先生はまだ生きておられます。ほら、あの作務衣姿の方です」

三上が車のスピードを落とすと、紺色の作務衣姿の痩せた男性と、カートに乗り麦わら帽子を被った人が歩道で話をしていた。

「あの乗り物はなんですか」

病院にある車椅子より重量感がある。

「シニアカーです。一回充電すれば何十キロも走行するそうです。このあたりの高齢者の便利な乗り物ですが、高いですよー」

三上は菜緒が乗るつもりでいると思つていようだ。

「あの家が依頼主の家です」

三上は運転しながら左手を上げて、マキノキの生垣に囲まれた豪壮な和風住宅を教えた。家の窓の位置では二階建

てのようだが、千鳥破風が何か所もあり、黒光りする瓦がふんだんに使われている。上空からの敵を迎え撃つ槍が並んだような門扉の上には、白いサルスベリの花が咲いている。

その家の前から右折すると中央線のないゆるやかな坂道になった。左右には雑草の上に網を被せたように、ピンクのヒルガオの花が無数に咲き、道端のコオニユリには、アゲハチョウが止まって蜜を吸っていた。

「お客さん、顔つきが変わりましたよ」

三上がルームミラーの中で笑つた。彼が乗り気でなかったのは物件のせいではなく、菜緒が泣きそうな顔で店頭に現れたからだだったのかもしれない。

「ヒルガオやコオニユリが咲いていますね」

「しかし、田舎ですからね。うちの会社の近くの駅まで車で二十分もかかりますよー」

荒れ地のヒルガオは、奥の雑木林の手前まで咲いている。萌黄色とピンクの糸で織つた絨毯を敷き詰めたようだ。

「野の花は好きですから……」

今まで三年間暮らした家は、町中にあり庭がなかったと言ふのをやめて、またヒルガオを眺めた。

「お若いのに、田舎がお好きとはねー」

菜緒はもうすぐ四十三歳になるので若くはないが、営業

職の彼は無難な呼び方をしているのだろう。

「あの大家のばあさんは『店子と会う』が条件で、お気に入りにならないと貸しませんからね。家賃は安いけど車がないと不便ですよー」

資料の安い物件を第一候補にした、土地勘のない菜緒に向かつて、三上は声を張り上げた。屋根があり健康であれば何とかなる。そう思つて菜緒は家を出たのだつた。

夫だった菊池と暮らしたのは三年間だったが、スーパーのパスタ売り場で、二人分と四人分の袋を前に泣いてしまったのが始まりで、夫婦二人暮らしの食料の買い物中に悲しくなつた。再婚だつた菊池は、家庭内の出来事への対応には昔の話をしてきた。たとえば、雨戸の不具合を質問すると、前妻と自分の意見の食い違いから説明が始まるので、尋ねるのが億劫になつた。菊池には悪気はなく、家庭生活が未経験の菜緒に詳しく説明したつもりなのだろう。五十代の男性に二十数年間の家族四人の生活を忘れてとは酷だが、当初から新生活への意気込みも感じられなかった。今、あの人は本当に夫だつたのだろうかとか菜緒は思う。連名で宅配便を送るとき、菊池は伝票の自分の名前の下に先妻の名を書いた。慌てる菜緒に「無意識に書いたから」と言つたが、その後も数回先妻の名前を呼んだ。

三上の車は、ヒルガオを見ている菜緒を気づかうようにゆつくりと進む。

「大家さんは、高齢の女性なんですわね」

菜緒は、もう家主に気に入られようと考えていた。のどかな場所で安価な家賃は、めつたにない物件だと思つている。

「はい、元氣すぎる八十歳です。さつきの医院の先生と同じ年と言つていましたよ。本人の前でつい、『ばあさん』と呼ばないように、僕は氣をつけていますから」

三上は家賃が安いから仲介料も安いはずなのに、ここまです案内してくれたのは暇だからなのだろうか。「三上不動産の三上」と名乗つたから経営者のようだ。

今日、菜緒が電車を下りると、駅の南口には全国チェーンの不動産会社があつたが、新築マンションの入居者募集を目にしただけで北口に回り、見るからに零細な三上不動産のガラス戸を開けたのだつた。

「この物件は、去年の春に斡旋しましたが、入居後一年で転居されました。家主には、散々叱られましたよ」

駅から歩いてきて、額から滴る汗を拭いている初対面の菜緒に向かい、三上は吊り上がった眉をさらに引き上げ、黒のフレイムのメガネを触つた。

「運転免許も車もないのではねー」

まるで、ハローワークの職員のようなことを三上は言った。菜緒は四十歳まで二十年間事務職で、パソコンを相手に仕事をしてきた。しかし、三年間のブランクは、新しく耳にするIT用語に追いつく自信がなかった。これからは、一日中体を動かして熟睡できる仕事があった。しかし、その前に一人でゆっくりする時間がほしかった。

荒れ地に咲くヒルガオは、五センチ前後の小さな花を広げ、わずか一日咲くだけなのに無心に空を見つめている。群生では息をのむほど美しいが、手折って花瓶に挿すとおれてしまう無欲な花だ。

「到着しましたよ。シメヨ様がお待ちです」
左側の景色がヒルガオから石垣になると、その上に寄棟造りの平屋が見えた。

「あの方がシメヨ様ですね」
「九人兄弟の末っ子だからシメヨだそうです」
三上は声を潜めながら言うと、ブリーフケースを手に車から飛び出した。

その家は、本宅とは違い古い和風住宅の離れ風だ。庭から道を見下ろして咲いている、赤いサルスベリの花びらが、ゆるやかな上り坂に散り積もって緋毛氈ひもせんが敷かれているようだ。三上によると気難しい大家かも知れないが、菜緒に

は、1LDKに畑つきで、その管理が条件なので家賃も安く好物件だった。

「初めまして、小山菜緒です」

赤く光ったシニアカーに乗って三上の説明を聞いているシメヨに挨拶をしても、軽く頷いただけだった。身長は百四十センチくらいで、藍染めのブラウスに小豆色の縞のモンペ姿だ。遠くからだ和小柄で可愛いお年寄りに見えたが、近づくと日に焼けた丸顔は、深い皺が縦横に走り逞しかった。

家の裏の竹林から風が通り抜けると涼しくて、熱中症警戒アラート地域とは別世界だ。町中よりも体感温度は低く感じる。赤いサルスベリの花も風に逆らわずに、フワフワと緋毛氈の厚みを増していく。三人の周囲では、ウスバキトンボが群れ飛び、畑の側にはタカサゴユリが数本斜めに咲いていた。

「間違って命名したんだろう」

シメヨが口を開くと、三上が「えっ」と後頭部のあたりから高い声を発した。

「サルスベリだよ。去年の秋にきたサルがあのお木に登ったけど、滑らなかつたんだ」

「サルもくるのかと、菜緒は唇を尖らせて三上を見上げた。
「かわいい、おサルさんが。そうですか」

シメヨは三上には答えずに、後部の荷台から取り出した日傘で菜緒を指した。

「はい、畑仕事と環境がお気に入りだそうですね。現在は無職ですがね」

三上は勝手なことばかり言うが、家賃のためなら仕方がない。サルやイノシシが出たら家に閉じこもればいいのだ。

「あんたは、職無しで家賃は払えるのかね」

「蓄えが少々あります。落ち着いたら就職先を探します」
今度は菜緒が勝手なことを口にした。職がないと不利と

言った三上は、サルスベリの木を眺めているが、成約させて早く帰りたいと汗で光った額が言っている。シメヨのシニアカーのハンドルの側にはお守りが下がっている。交通安全、家内安全、病気平癒など、高齢になると祈願先が増えるのは仕方がないのだろう。

「わたしは最近離婚しました。それに、結婚するときから勘当されましたから、保証人を頼む人もいないのです」

妹一家と暮らす母は、娘二人の親権と離婚歴がある相手との結婚に反対した。

「どうせ別れるから、会う必要はない」

孫たちとの生活を満喫している母は、トラブルに巻き込まれる予感がしたのでだろう。

「保証人なんかどうにでもなる。電化製品もあるから使つていいよ」

シメヨの決断に三上は書類を取り出した。気が変わらないうちにと契約を急いでいる。

「あの、家賃が安い理由は事故物件とか……」

家電まで使えるのが不思議で、菜緒は押印の前に確認しなくなった。三上は書類の端をつまみ上げたまま、「ちっ」と声を発した。まるで「あんたが事故物件だよ」と言う顔で。

「あたしは三年前まで、この家で暮らしていた。本宅には長男夫婦が住んでいたが、嫁が重い病になり、大学病院の近くに家を借りたんだ。それで、あたしが本宅に戻った。今までの店子は、みんな元気に転居したよ」

「イノシシが多いでしょう」

菜緒はまた三上に睨まれそうな質問をした。

「あー、このあたりのイノシシは先に気づいて逃げるよ。でも、彼らがママシを食べてくれるので、農家の人は助かっているんだ」

今度はママシかと菜緒が口を開く前に、

「あの広いお屋敷に、お一人ではご不自由ではありませんか」

三上がシメヨの顔を覗き込んでささぎった。

「用心棒のシエパードを敷地内で放し飼いにしているよ。両親は警察犬だ」

「よかったです。それは頼もしいですね」

安心したのは契約成立ではないかと、菜緒は思ったけれど、三上は書類に記入しながら大げさに笑った。

数日後、菜緒はウィークリーマンションから転居してきた。バス停から五分歩くと広い土地に咲くヒルガオが歓迎してくれた。しかし、歩く距離には不満はないが、市街往還のバスは日に数本で朝夕に集中していた。

菜緒が汗を拭きながらサルスベリの木を眺めていると、ゴトゴトと音がしてシニアカーに乗ったシメヨが現れた。家の周囲に砂利を敷き詰めているのは、防犯のためと言っていたが、たしかに音がすると便利だった。

今日の彼女は鍵渡しと室内の説明にきたのだが、上がり框を手すりも使わずに上がり、速足でリビングに入ったので足腰は丈夫だ。先日、三上の案内できたときは、玄関から室内を眺めただけだったが、二十畳のLDKの奥が対面式のキッチンで、玄関の左側には寝室、洗面所、浴室、トイレと続いている。壁には大画面のテレビまでセットされていた。

「草取りが面倒だからと庭に除草剤をまくのはだめ。枯

草に囲まれた家は美観を損なう。石垣の間の草取りも仕事だ。雑草は油断大敵、毎日注意していかないとな」

「ヒルガオが石垣に生えてもですか」

「もちろんだ。あの花の地下茎の繁殖力には腰を抜かすよ。切れた茎からも蔓が伸びるんだから。やつらは雑草界の怪物だ」

菜緒は美しい花のたくましい根が、まだ想像できないでいる。

「カラスウリだつて、熟れた実を喜んで絵に描く人もいるが、根は特大のサツマイモで、掘り上げるまでそりゃあ時間がかかる。畑に一本でも茎を見つけたら無視は禁物だ」

秋を彩るカラスウリの根がサツマイモ級だとは、知らないことばかりだった。

「よその家だつて表はよく見えても、中は恐ろしいぞ。家族も他人から始まるから」

たしかに的を射ていると菜緒は思う。花の上と安心して暮らしていたら、ジワジワと地下に傾いていた結婚生活だったのだ。菊池は、以前の四人暮らしの家族の声を聞きたくて、一人のときは壁に耳をあてていたのかもしれない。長い単身赴任の中で、家族が揃った日は貴重な思い出だったのだろう。交際を始めた頃は、妻に捨てられたような口

ぶりだったのに、信じた菜緒が愚かだった。

「去年の借主は、畑に除草剤をまいたから追い出した。契約違反だからね」

シメヨは具体的な仕事の内容を、キッチンのカウンタ―に寄りかかって説明する。除草剤を使ったのは、ママシがいたからではないかと尋ねたかったけれど、シメヨの機嫌を損なうので黙っていた。

「今の時代は女一人でも生きていけるよ。セクハラだと声を上げれば守られる。それに、便利な電化製品もあるから。ここの掃除係はあの人だから、タイマーをセットさえすれば黙って働く」

シメヨは黒く光るロボット掃除機を指した。円盤型のあの人は赤く点滅して充電中を知らせていた。

「便利な物ばかりで助かります」

「いや、あたしの家を管理してもらえるんだから。三上とは長年の付き合いでね、コンビニの裏の古い家も頼んでいるんだ。びっくりしたような顔だけど親切なんだよ」

シメヨはエプロンのポケットから家の鍵を取り出して渡した。今まではウィークリーマンションで暮らしていたので、チェックインもアウトもすべて機械が対応して、コンビニもカード決済なので、口を利く機会がなかった。久しぶりに会話をすると喉の奥が塩辛くなった。使わないと声

帯も不機嫌になる。

菜緒はずっと、実家で母親と二人で暮らしていた。しかし、妹一家四人が子供の世話を母親に頼みたいと、同居することになったので、実家を出て、会社の近くにワンル―ムの部屋を借りた。夕食で利用する食堂でよく顔を合わせるのが、関連会社に勤めていた菊池だった。

「小山さんのお宅はこの近くですか」

彼は、隣の小さなテーブルで定食を食べながら尋ねた。

醬油に浸した鱈の刺身をご飯の上のせて、髭が濃くなった口元へ運んだ。

「はい、実家から転居してきました。残業の帰りにはここをよく利用します」

菊池はシソの葉で刺身をクルリと巻いて食べた。箸使いが上手いと料理までがおいしく見えた。菜緒は半袖シャツを着た菊池の腕を眺めながら、五十代で亡くなった父を思い出した。この逞しい腕は誰からでも守ってくれると思っただのは、初めての一人暮らしの寂しさからだだったと、今ならわかったはずなのに。

「僕も毎晩、ここで日替わり定食のお世話になっていきます」

「そうですか。単身赴任中ですか」

食堂の店主の妻が空の膳と入れ替えに、コーヒーを笑顔で置くと、白い割烹着から揚げ物の匂いが漂った。

「いいえ、四年前から独身に戻りました。下の娘が社会人になると、家内から離婚届を突きつけられました」

笑うと走る目尻の数本の皺のせい、よけいに温厚な人柄に見えた。菜緒の会社でも離婚経験者は珍しくなかったが、彼は働き盛りの父親で一家を背負っているように見えただけ、ただ頷くだけにした。

「家を購入した後に転勤が多くなりました。娘たちは転校をしたくないとの理由で、妻と家に残りましたから、ずっと単身赴任ばかりでした。そして、子供が独立したら夫婦関係も解消になりました」

菜緒は熱いコーヒーを飲みながら、自分の話もしないと思えないような気がした。

「わたしの場合は、妹一家の同居の話に母が賛成したので家を出ました」

父が急逝して以来、二人暮らしになったので、母を病院や買い物と車に乗せて行つた。煩雑な手続きを手伝つた役所の帰りには、「菜緒を産んでよかった」と言った。しかし、母は将来を見通して損得勘定で妹を選んだのだ。

菊池は黙って、飲み干したコーヒーカーップをソーサーに戻した。よその家庭内の件には口出しは禁物で、無口を通

すのがよいとわかっている人だ。

「二人の娘は離婚には反対でした。将来、僕が病気の独居老人になって転がり込まれると迷惑だそうです。結局、妻は娘たちの言い分も無視して、別れたいの一点張りでした」

小さな行き違いが堆積して、夫婦の距離も離れてしまったのだろう。

その年の秋、菜緒は会社を退職して九州の本店に異動する菊池の後を追つた。今思うと、お互い一人暮らしの四十歳の女性と、五十歳を過ぎた男性には、恋愛感情など皆無だったのではないか。幼い頃、池の岸で仕留めて、ひらがなの「れ」の形になった蚊を水面に放すと、フナが現れてパクリと口に入れた。今は、あの場面をなぜか思い出してしまう。菜緒がフナだったのか、それとも蚊だったのか、もうどうでもいいことだけだ。

以前の、菊池一家が住んでいた家はリフォーム中なので、菜緒たちはしばらくアパートで暮らした。夕食をすませてテーブルを拭いた菜緒が、婚姻届けを菊池の前に広げると、テレビの野球中継を見ていた彼は、

「僕が亡くなつたら入籍はしていなくても、内縁関係でも遺族年金は出るから」

と、婚姻届けに記入する様子はなかった。同居とは結婚だと思っていた菜緒は、言葉を失ってしまったが、菊池はホームランを打った選手に「ヨシヨシ」と声をかけていた。それから数日後、リフォーム中の家に業者が二人でシテムキツチンを設置にきた。小さな確認のたびに、「奥さま、奥さま」と呼ばれると、不動の地位にも思えて、婚姻届けの保証人になってもらった。ビール数缶と引き換えに厚顔の奥さまになった。そして、

「転居後に、母が冷蔵庫を送るそうですから、今日新しい住所と氏名を知らせました」

と言いながら、菊池に婚姻届けとペンを渡した。冷蔵庫を注文して支払ったのは菜緒自身だった。同居期間の始まりから菜緒の嘘も始まった。

菜緒が借家に転居して翌日の朝、涼いうちに畑で野菜の収穫を始めた。新参者とわかるのか茶色の小さなカマキリが、細い鎌を振り上げて威嚇を始めた。シメヨが植えた夏野菜は、形は悪いがキュウリやナスがなっていた。

「全部あんたが食べていいよ」

背後からの声に振り向くと、日傘を杖代わりにしたシメヨがきていた。今日は赤紫の緋のモンペと同柄の上着姿で、真っ赤なりボンを巻いた麦わら帽子を被っていた。

「畑仕事は長袖に長ズボンに限る。うちに買ったままの嫁の作業着があるから、後で持ってくるよ」

菜緒は、ワンピースから出た足首のあたりが痒くなったので、長靴も買わなくては思っていた。二人が玄関前に止めたシニアカーに近づくと甘い匂いがした。それは前かごの中の、湯気で曇ったビニール袋から漂ってきた。そして、その側にはいつものように鎌の刃が光っていた。

「高齢者は地味な服で外に出たら、目立たないので事故にあう。鎌はマムシや毒虫退治の必需品だ」
がシメヨの持論だった。

「あら、カナヘビ君がいる。息子が小さいときにしばらく飼っていたんだ。トカゲの仲間であつたよ」

シメヨは雑草の根元に目をやった。そこには、背中に灰色の小さな四角い模様があり、両サイドには焦げ茶色のラインが尻尾まで続いている、体調二十五センチほどのトカゲがいた。そして、クルリとした茶色の目玉が光った瞬間、姿を消した。

「虫が好物なんだ。それも生きてまま食べる。餌をやる息子を覚えていて、ケースの蓋を開けると近づいてきたからね」

人差し指より小さい頭で危険度を判断しても、ヒトからの最初の一口は命がけだったと思うと、菜緒は急に涙目に

なってしまった。

「でも息子は、生きたコオロギを与えるのが嫌になり畑に放したよ。日光浴をさせないと病気にもなるらしいから」

シメヨは周囲の蚊を、タオルを振り回して追い払いながら言った。

「蜂蜜パンを焼いたから一緒に食べようと思ってね。朝ご飯はまだだろう」

「はい、焼きたてのパンは久しぶりです」

リビングに戻ると裏からの風が通り抜けて涼しかった。

ときどき、風の中に野の花の甘い香りがするので、午前中は網戸にしていた。

シメヨは汗をかいたビニール袋からパンを取り出すと、持参した二枚の紙のプレートをカウンターの上に並べた。

菜緒は一脚だけの、古い木製の椅子を引き出してシメヨに勧めた。一斤の蜂蜜パンを豪快に手で二分の一にしたシメヨは、顔を湯気に囲まれながら、

「おう、孤食の毎日だったけど二人で食べるのは楽しいのう。久しぶりだ」

と、フロアリングに届かない両足を、前後に揺らして笑った。彼女も寂しい人のようだ。

「インスタントコーヒーでも」

と菜緒が立ち上がろうとすると、

「後でいいから、腹いっぱい食べなさい。そしたら、体力気力もついてくる。そんな泣き顔で就職の面接に行くつもりかね」

シメヨが温かいパンをちぎって小さな口に入れると、日焼けた頬が上下に動いた。それを見た菜緒は涙をこぼしてしまった。

「あなた、思いっきり泣いていないんだろう。今日ここで泣けばいい、干からびるくらいに」

そうかもしれない、キャリアバッグを引いて家を出るときも涙が出なかった。

「あなたの家族と一緒に暮らすのは限界です」

菜緒の言葉にポカンと口を開けたままの菊池は玄関に立ちすくんでいた。菜緒は菊池を責めるよりも、一人暮らしの寂しさに負けて一緒になった自分自身が情けなかった。

菊池の家はキッチンと浴室のみをリフォームしただけだったが、それでも新生活当時は不得意な料理を覚えるのに夢中だった。しかし、ときが流れて目が暗闇に慣れたようになると、居間の壁にかかる有名キャラクターの時計、

床の間の博多人形、吊戸棚の奥のマグカップセットが気になった。「物には罪がない」とは、菊池の常套句だったが、今日のような夏の日、二階で大きな音がしたので、きし

む階段を上ってドアを開けると、娘たちのおもちゃ、小さな晴れ着、アルバムなどが散乱していた。虫干しのつもりか、押し入れから出して積み上げていたのが崩れ落ちたようだ。昔の子供部屋とは聞いていたが、それまでは用もないので二階に上がることもなかった。逆立ちをして床に金髪を広げた人形が、ドアを背に立ちすくむ菜緒を嘲笑っていた。その側には、開いたままのアルバムの中に母子手帳が二冊、菜緒が初めて目にする手帳からは、赤ん坊のむずかる声が聞こえて部屋を飛び出した。二階には四人家族の暮らしが残されていた。それは、捨てるのを忘れたと言いつくすくらい量の量ではなかった。

「あたしはねえ、何人もの店子を見ているから、店子が背負っている物はわかる。あんたは初対面のときに、三上と話しているあたしを、すぎるような目つきで見ている」

あのとときのシメヨは、菜緒には知らん振りをしていると思ったが、店子のチェックはしていたのだ。皺の重みで瞼がたれ下がっている小さな目は、CTスキャンなみの働きをしていたようだ。

「ここで全部吐き出したらいいい。あたしは、高齢だから聞いたことはすぐに忘れる。人には絶対言わないよ」

シメヨの包容力にすがりたい菜緒は、口の中のパンをひと息でのみ込んだ。そして、夫が名前を前妻と間違えたこ

とと、二階にあった家族の荷物の件を言った。しかし、すべて話すにはシメヨに対しての遠慮があった。

「肝心なのは、まだ胸の奥に隠しているね」

シメヨが丸い背中を伸ばしてカウンターに寄りかかると、まるで、伸びをした猫の体長が長くなったようだった。今の菜緒は人生の細い時計針の上での歩き方がわからない。バランスを崩しても、針にすぎり這い上がる術を見失っていると思う。

「二昨年、人を殺しました。生理が二か月遅れたので夫に相談しました。わたしの中では産む選択はありませんでしたけど」

菜緒は刻々と、体が勝手に母親へと変化するのが恐ろしかったし、なぜか育児をしたくなかった。動物園でも育児放棄をした母親がいるらしいが、菜緒もその部類に入るのだろう。そして、あのとときは相談でなく菊池を試したのだ。

「あの人は、『この歳になって、父親になるなんて娘たちに合わせる顔がない』と言いました。入籍に非積極的だったはずですよ」

大量の鼻水が口に流れ込み戸惑っている。

「三人目は迷惑だったか。授かったのに」

「わたしも、先妻の子に半分似ている可能性を考えると嫌でした」